

Keyword: 「主婦」「出産」「産休・育休」「子育て」「キャリア」

## 1. 研究の背景

現代の社会、あるいは少し前の社会での女性の立場について、私はとても興味がわいた。というのも、ある弁護士のドラマ(『99.9-刑事専門弁護士-』TBS 2016年放送)で、弁護士の女性が名刺を渡そうとすると相手の男性はその名刺を投げ、もう一人の男性弁護士にだけ話し始めたという場面があった。その後「男だらけの世界でなかなか認めてもらえなくて悔しい思いもたくさんして、それでも弁護士やってるんです。」という女性の言葉を聞いて、社会で女性にはハンディがあるのかと衝撃を受けた。

ニュースや他のドラマを見ていても、女性だからという理由で権限が弱かったり、意見を通してもらえなかったりする描写をみるのがよくある。力仕事に関してははからだつきの違いから、男性を優位にするのは分かる。しかし、力仕事とは無関係な様々な仕事において、なぜ女性だからという理由で立場が弱くなることがあるのか、とても疑問に思う。また、日本では国会議員に占める女性の割合は1割にも満たないと言われている。あまり政治を知らない私でも、政治家の多くは男性というイメージがある。むしろそれが普通だと思っていた。しかし、世界に目を向けると日本はかなり低い割合らしい。私はそれを知り、女性が男性と同じように活躍できない要因は何なのか知りたいと思った。

## 2. 先行研究の検討

女性が出産により退職する場合については、以下のような記述がある。

「出産を契機に退職をすると、その後の就業率は低く、再就職した場合も大半が非正規になる。家計経済研究所「消費生活に関するパネル調査」から1960代生まれから1980年代生まれの女性のデータによると、調査期間に第一子出産後退職した人のうち復職した割合は10年時点でも半分に満たず、復職した人のなかの正規就業の割合は5.5%である(樋口・坂本・萩原 2016:51)」(出産後の女性のキャリア継続の諸要因：女性の就労環境、「保活」、夫の家事育児に注目して、2022)

男性にも着目したい。日本ユニセフ協会が行った「先進国における家族にやさしい政策ランキング」によると、現在、男性の育休取得可能率は日本が1位である。しかし、2020年の男性育休取得率は7.48%と低い水準である。主な理由は「制度の理解ができていない」「利用したいが会社が認めてくれない」というものだ。2021年6月には育児・介護改正法が改正された。その中で、「育児休業制度の周知、育休取得の意向確認が義務化」された。男性の家事育児参加が進まない理由についての見解は、以下が参考になる。

「男性側の要因や状況的な要因だけでなく、妻が家庭責任意識を強く持ち、ゆえに家事・育児を行うことによって男性の家事・育児参加を制約するという女性側の要因もある」(同書)

「女性が出産を経て納得のいくキャリアを続けるためには、子育てをしながら働くことをネガティブに捉えない職場環境があり、復帰に際して保育所に入所できること、さらに夫が家事育児の責任をともに担う状況のすべてが必要であり、それをかなえるためには環境と本人の強い意志の両方が必要であることが、10人の事例全体を通して浮き彫りになった。」(同書)

### 3. 独自研究

独自研究として産休・育休をとっていた女性を対象にインタビュー調査を行った。始めに子供の年齢や育児休業取得の有無を聞き、妊娠時の就労状況や保育所のこと、夫との家事育児への積極性などを中心にインタビューを進めた。以下、「Yさん」と記述する。

Yさんには9歳の双子と2歳の子がいる。Yさんは家庭を持つ前から子供を授かりたいと思っていたとともに、経済的な面で考えても出産後も仕事を続けたいと思っていた。そのため、理系大学に通っていたYさんの周りは男社会に出て行く人が多かった中、Yさんは公務員になったという。公務員の育休期間は基本最大3年(子どもが3歳になるまで)と、基本1年、最大子どもが2歳になるまでしか育休が取得できない民間企業に比べると長いことがわかる。そのことを加味し、公務員になることを決めたようだ。その決断の結果、実際に育休を十分に取ることができたようだ。また、夫は会社員で出産後は1週間育休を取得した。このように家庭での旦那の支えが妻の心のゆとりを作るのだろう。

次に保育所のことについて質問をした。保育所に入所するにはポイントを持っておくことが重要であるため、Yさんは「保活」を早くから行っていた。それでも、保育所には入りにくかったようだ。3人目のときは兄弟のつてがありスムーズな入所が可能だった。しかし、保育所に預けられないせいで仕事に復帰できない人は多いだろう。Yさんの夫は家事育児にとっても協力的だそうで、助かっていると言っていた。社会でも家庭内でも問題が絡まっている状況は多いが、家庭にゆとりや余裕を持つことは、女性が家庭とキャリアをバランスよく進めることの支えになるだろう。

### 4. 結論と今後の課題

この研究では独自研究と先行文献から、さまざまなバックグラウンドを持つ女性がいることが分かった。またそれぞれの願望があること、そしてそれを実行できている人もいれば、自分の思いを抑えて家庭とのバランスをとっている人もいることを改めて知った。先行文献からみても分かる通り、家庭内での妻と夫の在り方や社会の雰囲気、妻の出産後のキャリアの幅を狭めている原因としてある。そしてそれに加えて、子どもを保育所に預けられない状態が続くことは、仕事を続ける続けられない以前に女性の負担になる。ここではその少しもの解決策として、近年希薄化している地域コミュニティを活性化させることを挙げたい。近隣との関係を深くすることは妻の負担を少しでも減らし、その結果、女性が社会で活躍できる環境を作ることができると思う。例えば、兄弟がいて下の子を迎えに行く時などに、少しの間近隣の人に上の子を見てもらうなど。少しの負担が積み重なることで大きなストレスに繋がるため、地域で支え合う意識を高めることでその負担は少しでも軽減されるのではないだろうか。

今回の研究では1人の女性にしか独自インタビューができなかったことが懸念点である。他にもさまざまな背景を持っている家庭はあり、100家庭あれば100通りの課題がある。そのため、今後は他にも違う問題を持った女性や男性、または世界にも目を向けて他の国の人にもインタビューを行い、違った点からの解決策を見つけたい。

#### 参考文献

前田正子・中里英樹『出産後の女性のキャリア継続の諸要因：女性の就労環境、「保活」、夫の家事育児に注目して』心の危機と臨床の知. 23, p.23-46, 2022

竹信三恵子・戒能民江・瀬山紀子編『管制ワーキングプアの女性たち：あなたを支える人たちのリアル』岩波書店, 2020

公益財団法人日本ユニセフ協会『「家族にやさしい政策」で先進国を順位付け -ユニセフ 新レポート』<https://www.unicef.or.jp/> (参照日:2023/11/10)